

2026 年 9 月 28 日

順天堂大学

学長 代田 浩之 殿

順天堂大学 外部評価委員会

2026 年度 順天堂大学外部評価委員会 評価報告書

1. 外部評価委員会の目的

順天堂大学では、『内部質保証に関する方針』、『内部質保証に関する規則』及び『自己点検・評価専門部会設置運営要領』に基づき、内部質保証の推進に必要な自己点検・評価を、毎年度、全学的に実施している。

2026 年 9 月に開催した外部評価委員会では、『外部評価委員会規程』に基づき、順天堂大学学長から依頼のあった以下のテーマについて、自己点検・評価の客観性及び妥当性、内部質保証の有効性に関する評価を実施した。

2. 評価項目

今回は、以下の 2 つのテーマを取り上げ、順天堂大学から提出された『2026(令和 8)年度 順天堂大学 外部評価委員会 評価依頼事項』及びその根拠資料、委員会当日(令和 8 年 9 月 2 日)の説明及び質疑応答に基づいて、客観性・妥当性・有効性の観点から評価を行った。

＜テーマ＞

- (1) 内部質保証の体制・運用の適切性について
- (2) 学修成果の測定・可視化、達成度評価の適切性について

3. 各テーマに対する評価

所定の様式（評価チェックリスト）に記載の項目に沿って評価を実施した。各テーマに対する主な意見は、以下のとおりである。

(1) 内部質保証の体制・運用の適切性について

<評価できる点>

- 全学で課題を明確にし、改善計画を作成し、目標の達成に向けて取り組んでいる。継続して効率的な組織づくり、活用、PDCAが行われている。
- 近年の高等教育を取り巻く地域及び国際社会の動向や変化を踏まえ、研究教育等に資する新たな体制や機能について、自らの課題意識に基づき、全学的に着手し取り組んでいることは評価できる。全学質保証に関わる横断的テーマを所掌する部門を設置し、横串の検証を強化するなどの取組は評価できる。
- 2023 年度認証評価の指摘を真摯に受け止め、改善を進めるとともに第 4 期認証評価に向けたスケジュールを策定し、工程表に基づいて自己点検・評価による質保証の取組が推進されている。大学が主体的に改革を推進することが内部質保証システムの目的であることから、内部質保証システムが機能しているといえる。
- 内部質保証の体制・プロセス、学生アンケート、FD・SD、教学 IR 等の制度・組織的な枠組みが一通り整備されている点は評価できる。
- 内部質保証とその結果に基づく持続的な改善に、組織を挙げて取り組んでいる。

<課題となる点>

- 大学協議会の長が学長であることから、学長から学長が諮問を受けて自ら学長に答申するように見える。全学質保証委員会は「改善方針案」を策定するが、「改善方策」は大学協議会が策定していることから、システム図はそれぞれの役割と権限を明確化して示した方が良い。
- 内部質保証の体制やプロセスが改訂されて間もないことから、各組織の役割分担や連携が実質的に機能するかについて今後の運用を通じた検証が必要である。特に、内部質保証の基盤となる学部・研究科の DP の適切性や各ポリシー間の整合性について十分な検証がなされておらず、早急な対応が求められる。
- 学生の意見を教育改善に反映する機会が各種アンケートに偏っているため、より多様な方法による学生参画の仕組みを検討する必要がある。
- 教学 IR 推進分室や教育・学生支援機構についても、内部質保証における役割と機能の適切性・実効性を今後検証していく必要がある。

<今後改善が期待される点>

- 時代の変化に即した、学生の積極的・持続的な参画、学生・教員間の双方向的な学修の実現に向けて、更なる注力が期待される。高校あるいは卒業後の就職先または卒業生との連携も強化し、双方向的な意見交換、相補的・相乗的な教育改善への取組を活発にしていけることが期待される。

- FD・SD については、授業改善にとどまらず、カリキュラムの整合性や大学全体の教育システムの改善まで対象を広げ、研修会への参加だけでなく、日常的な教育改善活動も含めて全構成員の FD・SD への参画を捉えることが望まれる。
- IR によるデータに基づく教学マネジメントについては、全学的な戦略に基づいてデータ収集の方針を決め、計画的・体系的に収集し、それを確実にカリキュラム改善に役立てる仕組みの更なる充実が望まれる。

(2) 学修成果の測定・可視化、達成度評価の適切性について

＜評価できる点＞

- 大学が課題を認識し、問題意識を持って改善する取組が継続的に行われている。全学を挙げて教育の発展・改善に取り組んでいる。
- 入学前学習や初年次教育、学部横断的教育、あるいは国際化に関わる教育などを重視し、取り組んでいることは評価できる。
- DP を策定し、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーを整備し、GPA により成績評価を行っている。キャップストーン科目にはルーブリックも併用しており、システムとしては機能しているといえる。
- 内部質保証上の課題として、学部・研究科の DP の適切性や各ポリシーとの整合性について検証する必要性が認識されており、改善に向けた方向性が示されている点、「アクティブラーニング」や「社会的・職業的自立を図る教育」、「学部横断的な教育」、「国際化に対応する教育」など、多様な教育活動が展開されている点、学修成果の可視化に向けて e ポートフォリオの整備が予定されている点など、学修成果を把握し、内部質保証の改善サイクルの実質化につなげようとする取組が進められている点は評価できる。
- 全学部で DP・CP を見直して、カリキュラムに反映している点は評価できる。

＜課題となる点＞

- 大学視点の教育システムとしては機能しているが、学修者視点からみると課題がある。学生から見てわかりやすい DP、身に付ける資質・能力の明確化、学年ごとに何が身についたのかのリフレクションとフィードバック、それを学生が自覚化するためのポートフォリオについて、それぞれの項目としては取り組んでいるが、学修者の視点で全体が仕組み化されていない。全学的な方針のもと、対応が求められる。
- 学生調査やアンケートも様々実施しているが、いくつか集約して基幹調査とそれ以外の調査というように切り分ける必要がある。今年度からは全国学生調査が本格実施となるが、評価が良い大学は、ポジティブリストとして公開されるとともに、次期認証評価にも使用される。早急な対応が求められる。
- 内部質保証の起点となる DP について、全学 DP と学部 DP の整合性や、学部 DP と修士・博士 DP との差分の有無を含め、その適切性を早急に検証する必要がある。

- DP と CP、DP と主要授業科目群との関係や、各授業科目を通じて DP に掲げる能力をどのように身に付けさせるのかを明確にするとともに、「アクティブラーニング」、「社会的・職業的自立を図る教育」、「学部横断的な教育」、「国際化に対応する教育」と各学部 DP との関係についても整理する必要がある。
- 卒業研究や修士・博士論文等の学修成果を客観的に評価するためのルーブリック等を全学的に整備することが求められる。
- e ポートフォリオによる学修成果の可視化を進める前提として、DP、主要授業科目群、評価方法の一貫性を確保し、それらが実際に機能しているかを検証することが、内部質保証の改善サイクルを実質化するうえでの課題であり、対応が求められる。
- DP 及びコンピテンシーの記載方法について、詳細に設定している学部とそうでない学部があり、ばらつきが大きい。

＜今後改善が期待される点＞

- 初等中等教育接続あるいは地域・産学連携などにおいて、幅広い視点から、貴学の特徴や特色を活かすよう努めていただきたい。
- 学修成果の「可視化」だけでなく、「自覚化」がこれから重要な要素になる。DP の見直し、ポートフォリオによるリフレクションとフィードバック、学修成果や成長実感の自覚化を一貫した形で取り組んでいただきたい。
- DP を学生に分かりやすく示すだけでなく、在学期間を通じて学生が DP を意識し、自らの学修成果と結び付けて捉えられる機会を設け、その過程に学生の意見を取り入れることもあってよい。

4. まとめ

2026 年度外部評価委員会は、2025 年度に実施した自己点検・評価結果に基づいて、上記のテーマについて評価を行った。それぞれのテーマにおいて、学長の主導の下、組織的・計画的に全学及び各部門の活動を検証し、課題・問題点の改善に向けて取り組んでいることが確認された。

内部質保証の体制・運用の適切性については、方針・規程に定める内部質保証体制が整備され、各部門で実施する自己点検・評価の結果をもとに全学の質保証組織による検証を経て改善を図る仕組みが構築されている。2026 年 1 月に質保証システム・プロセスを見直し、組織を挙げて機能の充実・改善を図っている点は評価できるが、各組織の役割分担や連携には不透明な部分も見られる。質保証の仕組みが実質的に機能するか、今後の運用を通じた検証が必要である。教育・学生支援機構や教学 IR 推進分室についても、内部質保証における役割と機能の適切性・実効性を検証していく必要がある。

学修成果の測定・可視化、達成度評価の適切性については、大学として課題と認識しており、学修成果を把握して内部質保証の改善サイクルの実質化につなげようとする取組が進められている点は評価できる。DP に関しては、大学の教育理念と資質・能力の関係は整理されているが、全学 DP と各学部 DP の整合性や学部 DP と大学院 DP との差分、各学部でどのような資質・能力を身に付けることができるのか、コンピテンシーも含めて検討する必要がある。また、学修成果の評価・可視化に関しては、DP、対応する授業科目群、評価方法の一貫性を確保することが前提であるが、各部門の対応にバラツキや不安定さが見られる。身に付ける資質・能力の明確化、ルーブリックの活用も含めた評価手法の充実、ポートフォリオによる視覚化、学生が自覚化するためのリフレクションとフィードバックなどについて、一貫した取り組みとなるよう、全学的な対応が求められる。

さらなる課題解決に向けて、質保証システムを有機的に機能させ、組織的・計画的に改善活動を遂行することを期待する。

以 上

2026 年度 順天堂大学外部評価委員会 委員

所属	氏名
学校法人長聖理事長	○ イチカワドイル 徳恵
東海大学体育学部特任教授、 東海大学スポーツプロモーションセンター次長	勝田 隆
リクルート進学総研所長、カレッジマネジメント編集長	小林 浩
芝浦工業大学教育イノベーション推進センター教授	榊原 暢久
筑波大学医学医療系地域医療教育学教授、 筑波大学附属病院副病院長	前野 哲博

※委員長：○印